

On the Robustness of Some
Multivariate Test Procedures

南山大 経済 伊藤 孝一

§ 1. 序

本個の多変量母集団の確率ベクトル

$$\underline{x}'_t = [x_{1t} \ x_{2t} \ \dots \ x_{pt}] \quad t=1, 2, \dots, k \quad (1.1)$$

の分布法則は n の t -サンプルによる p 次元ベクトル \underline{x}_t として、特に、
1次元、2次元、3次元、4次元の t -サンプルは n 次元 n 次元 n 次元 n 次元
と見なせることに注意する。

$$E(\underline{x}_t) = \underline{\mu}_t \quad (1.2)$$

$$E(\underline{x}_t - \underline{\mu}_t)(\underline{x}_t - \underline{\mu}_t)' = \underline{\Sigma}_t \quad (1.3)$$

$$E(x_{it} - \mu_{it})(x_{jt} - \mu_{jt})(x_{kt} - \mu_{kt}) = k_{ijl}^{(t)} \quad (1.4)$$

$$E(x_{it} - \mu_{it})(x_{jt} - \mu_{jt})(x_{kt} - \mu_{kt})(x_{lt} - \mu_{lt}) \\ = k_{ijkl}^{(t)} + \sigma_{ij}^{(t)} \sigma_{kl}^{(t)} + \sigma_{ik}^{(t)} \sigma_{jl}^{(t)} + \sigma_{il}^{(t)} \sigma_{jk}^{(t)} \quad (1.5)$$

すなわち、 x_{it} , μ_{it} は n 次元 \underline{x}_t , $\underline{\mu}_t$ の i 要素を表わ
し、 $\underline{\Sigma}_t = (\sigma_{ij}^{(t)})$ は $p \times p$ の t の座標符号対称行列とし、 n
の要素 k_{ijl} は有限、すなわち、 $k_{ijl}^{(t)}$, $k_{ijkl}^{(t)}$, $i, j, k, l, m = 1, \dots, p$

2, ..., k, は \bar{x}_t の n_t 個の標本, y 次の変数 $x_{t\alpha}$ を持つものとし, μ は有限次元である。この k 組の母集団から抽出した n_t 個の $N_t, t=1, 2, \dots, k$, の無作為標本の N 個の互に独立な確率ベクトル

$$\tilde{x}_{t\alpha} = [x_{t\alpha} \ x_{2t\alpha} \ \dots \ x_{pt\alpha}],$$

$$t=1, 2, \dots, k; \alpha=1, 2, \dots, N_t \quad (1.6)$$

による表わすこと。このとき, $N = \sum_{t=1}^k N_t$, n_t , (i) $\tilde{x}_{t\alpha}$ と $\tilde{x}_{s\beta}$ は $t \neq s$ 或は $\alpha \neq \beta$ のときは互に独立であり, (ii) t は一定のときは, $\tilde{x}_{t\alpha}, \alpha=1, 2, \dots, N_t$, は互に独立な同一分布に従うこと, n_t の 1 から n_t までの $x_{t\alpha}$ は (1.2) ~ (1.5) によるものである。

この k 組の y 変数母集団の平均ベクトルは (1.6) の帰無仮説

$$H_0: \mu_1 = \mu_2 = \dots = \mu_k \quad (1.7)$$

に対する検定

H_1 : (1.7) の等式の少なくとも一つが成立しないこと。この検定は Hotelling の T^2 検定である。母集団の分布が正規分布であるとき, この分散共分散行列が等しいとき, 検定の下に導かれる Hotelling の T^2 検定は y 次元の μ の空間内

$$\left\{ T^2: T^2 > T_{\alpha}^2(p, k-1, N-k) \right\} \quad (1.8)$$

である (Hotelling [3])。このとき, $\bar{x}_t = \sum_{\alpha=1}^{N_t} \tilde{x}_{t\alpha} / N_t$, $\bar{x} = \sum_{t=1}^k v_t \bar{x}_t$, $v_t = N_t / N$, $\tilde{S}_t = \sum_{\alpha=1}^{N_t} (\tilde{x}_{t\alpha} - \bar{x}_t)(\tilde{x}_{t\alpha} - \bar{x}_t)'$

$$1/n_t, n_t = N_t^{-1}, Q_B = \sum_{t=1}^k N_t (\bar{x}_t - \bar{x})(\bar{x}_t - \bar{x})', \underline{\Sigma}_0 = \sum_{t=1}^k n_t \underline{\Sigma}_t / (N-k) \quad \text{かつ } \text{rank} = 2,$$

$$T_0^2 = t_0 Q_B \underline{\Sigma}_0^{-1} \quad (1.9)$$

なるが, $T_0^2(p, k-1, N-k)$ は統計量 T_0^2 の H_0 の下にあるべき標本分布, 上方 $100\alpha\%$ 点と表わす. 乃ち, 母集団は同一の上と同い假定, 下は α 点と α 点の Wilks の大序比検定の大 2α の棄却域は

$$\{ W : W < W(\alpha) \} \quad (1.10)$$

なる (Wilks [8]). なるが,

$$W = |(N-k) \underline{\Sigma}_0| / |Q_B + (N-k) \underline{\Sigma}_0| \quad (1.11)$$

なるが, $W(\alpha)$ は統計量 W の H_0 の下にあるべき標本分布の下方 $100\alpha\%$ 点と表わす. なるが, 母集団の分布の正規性の假定の下は α 点と α 点の James の T_r^2 検定の大 2α の棄却域は

$$\{ T_r^2(k) : T_r^2(k) > T_{r\alpha}^2(k) \} \quad (1.12)$$

なる (James [6]). なるが, $\bar{\Sigma}_t = (\underline{\Sigma}_t / N_t)^{-1}$, $\bar{\Sigma} = \sum_{t=1}^k \bar{\Sigma}_t$, $\hat{\bar{x}} = \bar{\Sigma}^{-1} \sum_{t=1}^k \bar{\Sigma}_t \bar{x}_t$ かつ $\text{rank} = 2$,

$$T_r^2(k) = \sum_{t=1}^k (\bar{x}_t - \hat{\bar{x}})' \bar{\Sigma}_t (\bar{x}_t - \hat{\bar{x}}) \quad (1.13)$$

なるが, 乃ち, $T_{r\alpha}^2(k)$ は統計量 $T_r^2(k)$ の H_0 の下にあるべき標本分布の上方 $100\alpha\%$ 点と表わす.

乃ち, $k=1$ の場合, 母集団の分散共分散行列は同一の

無検定

$$H_{02}: \underline{\Sigma} = \underline{\Sigma}_0 \quad (\text{但し, } \underline{\Sigma}_0 \text{ は } \underline{\Sigma} \text{ と } \underline{\Sigma}_0 \text{ との } p \times p \text{ の } \underline{\Sigma} \text{ の逆} \\ \text{符号対称行列である}) \quad (1.14)$$

$$H_{03}: \underline{\Sigma} = \sigma^2 \underline{I}(p) \quad (\text{但し, } \underline{I}(p) \text{ は } p \times p \text{ の単位行列,} \\ \sigma^2 \text{ は } \sigma^2 \text{ のスカラー}) \quad (1.15)$$

$$H_{04}: \sum_{g=1}^k g_{\alpha} = 0 \quad (g, \alpha = 1, 2, \dots, \ell) \quad (1.16)$$

但し

$$\underline{\Sigma}(p \times p) = \begin{bmatrix} \underline{\Sigma}_{11} & \dots & \underline{\Sigma}_{1\ell} \\ \vdots & & \vdots \\ \underline{\Sigma}_{\ell 1} & \dots & \underline{\Sigma}_{\ell\ell} \end{bmatrix} \begin{matrix} k_1 \\ \vdots \\ k_\ell \end{matrix}$$

を仮定する。この場合、 k と ℓ の場合も同様、母集団の分布が正規分布を仮定したときの検定は、Anderson [1] (Anderson [1])。以下、 $k=1$ の場合も、誤字を省略する。(1.14) に対応する検定の F 値の分布領域は

$$\{ \lambda_2 : \lambda_2 < \lambda_2(\alpha) \} \quad (1.17)$$

である。ここで、 $V = n \underline{\Sigma} / N \approx 1$ 、

$$\lambda_2 = | \underline{\Sigma}_0^{-1} |^{\frac{1}{2}N} \exp \left\{ \frac{N}{2} \text{tr} (\underline{I}(p) - V \underline{\Sigma}_0^{-1}) \right\} \quad (1.18)$$

である。ここで、 $\lambda_2(\alpha)$ は統計量 λ_2 の H_{02} の下での分布の $100\alpha\%$ 分位数を表す。(1.15) に対応する検定の F 値の分布領域は

$$\{ \lambda_3 : \lambda_3 < \lambda_3(\alpha) \} \quad (1.19)$$

より、

$$\lambda_3 = | \underline{v} |^{\frac{N}{2}} / (t_2 \underline{v} / \rho)^{\frac{1}{2} k N} \quad (1.20)$$

より、 $\lambda_3(\alpha)$ は統計量 λ_3 の H_0 の下にある確率分布の下で $100\alpha\%$ 棄却域を示す。つまり、(1.16) に於ける棄却域は

$$\{ \lambda_4 : \lambda_4 < \lambda_4(\alpha) \} \quad (1.21)$$

より、

$$\lambda_4 = | \underline{v} |^{\frac{N}{2}} / \prod_{g=1}^2 | \underline{v}_{g3} |^{\frac{N}{2}} \quad (1.22)$$

より、

$$\underline{v} (k \times k) = \begin{bmatrix} \underline{v}_{11} & \dots & \underline{v}_{12} \\ \vdots & & \vdots \\ \underline{v}_{21} & \dots & \underline{v}_{22} \\ k_1 & \dots & k_2 \end{bmatrix}$$

より、 $\lambda_4(\alpha)$ は統計量 λ_4 の H_0 の下にある確率分布の下で $100\alpha\%$ 棄却域を示す。

各個の母集団の場合、歸無假説

$$H_0: \underline{\Sigma}_1 = \underline{\Sigma}_2 = \dots = \underline{\Sigma}_k \quad (1.23)$$

を検定するもの、正規分布の仮定の下に、以下の順序比較法に従って、 $100\alpha\%$ 棄却域を示す。

$$\{ \lambda_5 : \lambda_5 < \lambda_5(\alpha) \} \quad (1.24)$$

である。 \$\Rightarrow\$ 10, $\underline{V}_t = n_t \bar{X}_t / N_t, \underline{V} = \sum_{t=1}^k (V_t \underline{V}_t)$ と
 $\Gamma \text{ である,}$

$$\lambda_S = \frac{\kappa}{\pi} \frac{\prod_{t=1}^k |\underline{V}_t|^{N_t/2}}{|\underline{V}|^{N/2}} \quad (1.25)$$

22, $\lambda_S(\alpha)$ は統計量 λ_S の Hosô の下 $100\alpha\%$ の標本百分率
 下 $100\alpha\%$ 差を看した。

以上述べた可成りの中心或いは分散共分散行列に因りて種々の
 の仮説検査の2つの標本の検査の下に於ける検査法が、第
 分散共分散行列の検査の成立してゐる、或は正規分布の假
 定の成立してゐる、如何なる影響を及ぼすか、主
 として標本の立場から次の条件下に於ける考察をして置く。
 3。

§ 2. 多変量の Behrens - Fisher 問題

$k = 2$ の場合、2つの母集団の分散は $N(\mu_1, \Sigma_1), N(\mu_2, \Sigma_2)$ と検査する、 $\Sigma_1 = \theta \Sigma_2$ (但し、 θ は既知の μ
 の1つ) と検査してゐる、(1.7) の H_0 の検査の問題は多
 変量の Behrens - Fisher 問題である。 \Rightarrow 10 以下に於ける
 上、 θ の正確な検査法を求めよう。

10, $N_1 \leq N_2$ と検査して、 $p \times N$ の行列

$$\underline{Y} (p \times N) = \underline{X}_1 (p \times N_1) \cdot \underline{A} (N_1 \times N) + \underline{X}_2 (p \times N_2) \cdot \underline{B} (N_2 \times N) \quad (2.1)$$

と考察する。 \Rightarrow 10, $\underline{X}_1 = [x_{11}, \dots, x_{1N_1}]$, $\underline{X}_2 = [x_{21}, \dots$

$x \in N_2$ である, A, B はそれぞれ要素 c_1 と c_2 を $N_1 \times N, N_2 \times N$ の行列である, c_1 の要素は N の値の母数である. したがって, 条件

$$E(\underline{y}_r) = \underline{\mu} = \mu_1 - \mu_2 \quad (2.2)$$

$$E(\underline{y}_r - \underline{\mu})(\underline{y}_s - \underline{\mu})' = \delta_{rs} \Sigma \quad (2.3)$$

による, r は r の決定 r の r である, 但し, \underline{y}_r は \underline{y} の r 成分, $r = 1, 2, \dots, N$, δ_{rs} は r と s が等しいときは 1, 異なるときは 0 の Kronecker delta 行列である. $n = N - 1$, H_0 は

$$H_0^* : \underline{\mu} = \underline{0} \quad (2.4)$$

と同様である, $\bar{\underline{y}} = \sum_{r=1}^N \underline{y}_r / N$, $\underline{S} = \sum_{r=1}^N (\underline{y}_r - \bar{\underline{y}})(\underline{y}_r - \bar{\underline{y}})' / n$, $n = N - 1$, と定義して, H_0^* の検定 T の統計量 T_s^2 の検定域は

$$\{ T_s^2 : T_s^2 > T_{\alpha}^2(n) \} \quad (2.5)$$

による, n は n の n である, $n = n$,

$$T_s^2 = N \bar{\underline{y}}' \underline{S}^{-1} \bar{\underline{y}} \quad (2.6)$$

である, H_0^* の T の検定量 T_s^2 は自由度 n の一般化 Student T^2 の検定量である, $T_{\alpha}^2(n)$ は n の $100 - \alpha$ % 点である. \therefore 条件 (2.2), (2.3) の条件

$$A' \underline{c}(N_1) = \underline{c}(N), \quad B' \underline{c}(N_2) = \underline{c}(N) \quad (2.7)$$

$$A'A = c_1 I(N), \quad B'B = c_2 I(N) \quad (2.8)$$

$$\Sigma = c_1 \Sigma_1 + c_2 \Sigma_2 \quad (2.9)$$

と同様にして ϵ が証明できる。 \Rightarrow 10, $\epsilon(L)$ は n の要素が Γ へ n 個ある $L \times 1$ の列ベクトル, $I(L)$ は $L \times L$ の単位行列である, c_1, c_2 は定数。従って, (2.7), (2.8) を満足する $N_1 \times N_1, N_2 \times N_2$ の行列 A, B なるものを,

$$N \leq N_1 \leq N_2 \quad (2.10)$$

$$c_1 \geq N/N_1, \quad c_2 \geq N/N_2 \quad (2.11)$$

が成立する。 Γ 上の ϵ は ϵ である。 \Rightarrow 11, (2.10), (2.11) を満足する N, c_1, c_2 の値を与える ϵ なる Γ を, (2.7), (2.8) の解 ϵ として, A, B が与えられる。 \Rightarrow 12, Γ の検査法 (2.5) が適用される。 \Rightarrow 13, 各検査の Γ への算合 D と Γ との一致, あるいは (2.5) の検査の回数 N の単調増加回数, c_1, c_2 の単調減少回数 n がある。 \Rightarrow 14, D の中 Γ の最良の検査は

$$N = N_1 \leq N_2 \quad (2.12)$$

$$c_1 = 1, \quad c_2 = N_1/N_2 \quad (2.13)$$

を満足する Γ がある。 \Rightarrow 15, 算合 (2.7), (2.8) の解 Γ として, $A = (a_{\alpha\gamma}), B = (b_{\beta\gamma})$ と Γ と Γ と,

$$a_{\alpha\gamma} = \delta_{\alpha\gamma}, \quad \alpha, \gamma = 1, 2, \dots, N_1,$$

$$b_{\beta\gamma} = \begin{cases} \delta_{\beta\gamma} (N_1/N_2)^{\frac{1}{2}} - (1/(N_1 N_2))^{\frac{1}{2}} + (1/N_2), & \beta \leq N_1, \\ \frac{1}{N_2}, & N_1 < \beta \leq N_2, \quad \gamma = 1, 2, \dots, N_1 \end{cases} \quad (2.14)$$

1) $\delta > 0$ と $\delta < 0$ とある。

以上の方法で、一変量の場合の Schaffé の方法 (Schaffé [7]) に拡張してもよい。特別解 (2.14) の Bennett [2] も $\delta > 0$ と $\delta < 0$ とある。二変量問題は $\delta > 0$ と $\delta < 0$ と $\delta = 0$ との区別が必要である。多変量 (1.8) に用いた $\delta > 0$ が $\delta < 0$ 、二変量の場合 T^2 の自由度 ($N_1 + N_2 - 2$) の F 分布と T^2 の Student T^2 分布に近しい。上に F の D の中で、拡張多変量 (2.5) の二変量の場合に用いた $\delta > 0$ 、 $\delta < 0$ の検出力は当然 ($\delta > 0$ の場合) $\delta < 0$ 、 $N_1 = N_2$ が有利である。検出力の低下が割合少く $\delta > 0$ が数値計算によっても確かである (Ito [4])。

次に、多変量の Behrens-Fisher 問題に $\delta > 0$ 、(1.8) に $\delta < 0$ (1.12) より得られた T^2 の検出力 $\delta > 0$ の多変量

$$\{ T_{\delta}^2(2) : T_{\delta}^2(2) > \chi_{\delta}^2(p) \} \quad (2.15)$$

$$\{ T_{\delta}^2(2) : T_{\delta}^2(2) > \chi_{\delta}^2(p) \} \quad (2.16)$$

を用いる H_0 の検定 T の $\delta > 0$ の検定 $\delta < 0$ 。二変量、検定量 $T_{\delta}^2(2)$, $T_{\delta}^2(2)$ の $\delta > 0$ と $\delta < 0$ の場合 T_{δ}^2 , $T_{\delta}^2(2)$ である。 $\chi_{\delta}^2(p)$ の自由度 p の χ^2 分布の上から $100\alpha\%$ 値である。二変量の場合、 H_0 の下で T の検定量 $T_{\delta}^2(2)$ の非中心分布による $\delta > 0$ と $\delta < 0$ の区別は数値計算によっても確かである (Ito [4])。

$$P_{\delta} \{ T_{\delta}^2(2) \leq z_0 \mid H_1 \} = G_{\rho}(z_0 | \lambda)$$

$$\begin{aligned}
& - \sum_{t=1}^2 \frac{1}{n_t} \left[\frac{1}{4} \{ [t|t] + [t]^2 \} (E+1) \right. \\
& \quad + \frac{1}{4} [t|t] (E-1) + \frac{1}{2} \phi_{1t} (E-1) E + \phi_{2t} E^2 \\
& \quad \left. + \frac{1}{4} \phi_{3t} (E-1) E^2 \right] (1-E) G_p(\theta|\lambda) \\
& + O(n_t^{-2}), \tag{2.17}
\end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
& \Rightarrow \mu, \chi_a^2(p) = 2\theta, \rho = 1/2, \underline{v} = \mu_1 - \mu_2, \underline{V} = \frac{\Sigma_1}{N_1} + \frac{\Sigma_2}{N_2}, \\
& \lambda = \underline{v}' \underline{V}^{-1} \underline{v}, G_p(\theta|\lambda) = e^{-\frac{1}{2}\lambda} \sum_{i=0}^{\infty} \frac{\lambda^i}{2^{i+1} i!} G_{p+i}(\theta), \\
& G_a(\theta) = [\Gamma(a)]^{-1} \int_0^{\theta} t^{a-1} e^{-t} dt, G_a(\theta|0) = G_a(\theta), \\
& E^a G_p(\theta|\lambda) = G_{p+a}(\theta|\lambda), a = 0, \pm 1, \pm 2, \dots, \infty
\end{aligned}$$

$$[t] = t \underline{v}' \underline{V}^{-1} (\underline{\Sigma}_t / N_t),$$

$$[t|t] = t \underline{v}' \underline{V}^{-1} (\underline{\Sigma}_t / N_t) \underline{V}^{-1} (\underline{\Sigma}_t / N_t),$$

$$\phi_{1t} = t \underline{v} \underline{v}' \underline{V}^{-1} (\underline{\Sigma}_t / N_t) \underline{V}^{-1} (\underline{\Sigma}_t / N_t) \underline{v},$$

$$\phi_{2t} = \frac{1}{2} \{ \phi_{1t} + t \underline{v}' \underline{V}^{-1} (\underline{\Sigma}_t / N_t) \cdot t \underline{v} \underline{v}' \underline{V}^{-1} (\underline{\Sigma}_t / N_t) \underline{v} \},$$

$$\phi_{3t} = t \{ \underline{v} \underline{v}' \underline{V}^{-1} (\underline{\Sigma}_t / N_t) \underline{V}^{-1} \}^2$$

(2.17) は H_0 の T_{n_t} について,

$$P_n \{ T_{n_t}^2(2) \leq 2\theta | H_0 \} = G_p(\theta)$$

$$- \frac{1}{4} \sum_{t=1}^2 \frac{1}{n_t} \{ 2 [t|t] E + [t]^2 (E+1) \} (1-E) G_p(\theta)$$

$$+ O(n_t^{-2}), \tag{2.18}$$

とある。従って、統計量 $T_{n_t}^2(2)$ の確率分布は $n \rightarrow \infty$ ならば、 χ^2 分布の $T_{n_t} \rightarrow \infty$ のとき、 χ^2 の近似が成り立つことが証明

に於て (Ito + Schull [5]). したがって,

$$P_n \{ T_n^2(z) \leq 2\theta \mid H_1 \} \doteq P_n \{ X^2(t) \leq 2\theta/c \mid H_1 \} \quad (2.19)$$

より、 $X^2(t)$ は自由度 t の χ^2 分布に従う統計量、 c, t は t 次連立方程式の解である。

$$ct = t \sum_{t=1}^2 \left\{ (1-r_t) \sum_t \sum_t^{-1} + N_t \mu_*^{(t)} \mu_*^{(t)'} \sum_t^{-1} \right\}$$

$$c^2 t = t \left\{ \sum_{t=1}^2 (1-2r_t) (\sum_t \sum_t^{-1})^2 + I(p) + 2 \sum_{t=1}^2 N_t \mu_*^{(t)} \mu_*^{(t)'} \sum_t^{-1} \sum_t \sum_t^{-1} \right\} \quad (2.20)$$

但し、 $\mu_t = \mu_* + \mu_*^{(t)}$, $\sum_{t=1}^2 N_t \mu_*^{(t)} = 0$, $\sum_t = \sum_{t=1}^2 (r_t \sum_t)$.
 (2.18), (2.19) 式を用いて、多変量 (2.15), (2.16) の真の θ の近似値を求めるとが目的である。 $\alpha = 0.05$ とし、 $p = 1, 2, 3, 4$; $\{\sum_1, \sum_2\}$, $\{N_1, N_2\}$ の種々の組合せに対して、数値計算の結果を示す。まず N_1, N_2 に対して c の値が得られる。したがって、 $v = N_1/N_2$, \sum_1, \sum_2^{-1} の固有根を θ とし、 v の一定値に対して、 T_n^2 検定の実験的 θ の名目値が 0.05 より常に大きくなる。これは、 T_n^2 検定の $\theta < 1$ のとき真の θ の名目値が 0.05 より大きくなる。 $\theta > 1$ のとき逆である。したがって、 T_n^2 検定の θ の影響は T_n^2 検定の $\theta < 1$ のときより少ない。以上の結果は一般に θ の組合せに依存する (Ito [4])。

§ 3. 本個の母集団の適合

母集団分布の正規性，算分散共分散行列の微分と等しい， H_0 を仮定する。このとき，各目的関数 f_1, f_2, \dots, f_r の変動域を考察しよう。すると，

$$\hat{T}_u^2 \text{ 検定 } \{ \hat{T}_u^2(k) : \hat{T}_u^2(k) > \chi_{\alpha}^2(p(k-1)) \} \quad (3.1)$$

$$\hat{T}_v^2 \text{ 検定 } \{ \hat{T}_v^2(k) : \hat{T}_v^2(k) > \chi_{\alpha}^2(p(k-1)) \} \quad (3.2)$$

$$\hat{T}_w^2 \text{ 検定 } \{ \hat{T}_w^2(k) : \hat{T}_w^2(k) > \chi_{\alpha}^2(p(k-1)) \} \quad (3.3)$$

である。統計量 $\hat{T}_u^2(k)$ は (1.9) の T_0^2 に等しく， $\hat{T}_v^2(k)$ は (1.13) の $T_v^2(k)$ に等しく， $\hat{T}_w^2(k)$ は (1.11) の T_w^2 に等しく， $\hat{T}_w^2(k) = -(N-k) \log W$ と表わすとき， $\chi_{\alpha}^2(p(k-1))$ は自由度 $p(k-1)$ の χ^2 分布の $100\alpha\%$ 点である。

k が一定で $N \rightarrow \infty$ とすると， $\hat{T}_w^2(k)$ は $\hat{X}_w^2(k)$ に漸近収束する。すなわち， $\hat{T}_w^2(k) \underset{\sim}{=} \hat{X}_w^2(k)$ とする。

$$\hat{X}_w^2(k) = -(N-k) \log \left| (N-k) \hat{\Sigma} \right| / \left| Q_0 + (N-k) \hat{\Sigma} \right|$$

$$= (N-k) \log \left| \hat{\Sigma}(p) \right| + \frac{1}{N-k} Q_0 \hat{\Sigma}^{-1}$$

$$= \hat{t}_{Q_0} \hat{\Sigma}^{-1} - \frac{1}{2(N-k)} \hat{t}_{(Q_0 \hat{\Sigma}^{-1})^2} + O(N^{-2}) \quad (3.4)$$

したがって， $\hat{T}_u^2(k)$ は $\hat{t}_{Q_0} \hat{\Sigma}^{-1}$ に漸近収束するから， N が大きいとき N_t に等しく， \hat{T}_u^2 検定と \hat{T}_v^2 検定は同等である。

次に，統計量 $\hat{T}_u^2(k)$ の標本分散は， k が一定で $N \rightarrow \infty$ のとき H_0 に等しく k_j に近似的である。したがって，

$$P_n \{ \hat{T}_n^2(k) > x \mid H_1 \} \approx P_n \{ X^2(f) > \frac{x}{c} \} \quad (3.5)$$

\Rightarrow 即, c, f 10 次の連立方程式の解である。

$$cf = t \sum_{t=1}^k \left\{ (1-v_t) \Sigma_t \Sigma_t^{-1} + N_t \mu_*^{(t)} \mu_*^{(t)'} \Sigma_t^{-1} \right\}$$

$$\begin{aligned} 2c^2f &= 2t \left\{ \sum_{t=1}^k (1-2v_t) (\Sigma_t \Sigma_t^{-1})^2 + E(p) \right. \\ &\quad \left. + 2 \sum_{t=1}^k N_t \mu_*^{(t)} \mu_*^{(t)'} \Sigma_t^{-1} \Sigma_t \Sigma_t^{-1} \right\} \\ &\quad + 4 \sum_{t=1}^k (1-v_t) \sum_{i,j,l=1}^p k_{ijl}^{(t)} (\mu_*^{(t)'} \Sigma_t^{-1})_i (\Sigma_t^{-1})_{jl} \\ &\quad + \sum_{t=1}^k \frac{(1-v_t)^2}{N_t} \sum_{i,j,l,m=1}^p k_{ijlm}^{(t)} (\Sigma_t^{-1})_{ij} (\Sigma_t^{-1})_{lm} \quad (3.6) \end{aligned}$$

但し, $\mu_t = \mu_* + \mu_*^{(t)}$, $\sum_{t=1}^k N_t \mu_*^{(t)} = 0$, 即ち, $(\mu_*^{(t)'} \Sigma_t^{-1})_i$ は μ_t の $\mu_*^{(t)'} \Sigma_t^{-1}$ の成分である, $(\Sigma_t^{-1})_{ij}$ は $p \times p$ の Σ_t^{-1} の (i,j) 成分を表わす. (3.6) に $2, \dots, k=2$, $k_{ijl}^{(t)} = 0$, $k_{ijlm}^{(t)} = 0$ とすれば, 方程式 (2.20) の解は $t=0$.

(2) λ , 統計量 $\hat{T}_n^2(k)$ の標本分布は, v_t は一定 $v \sim N(2k-1, 2)$ とし, v_t の t 10 近似) と仮定する。したがって,

$$P_n \{ \hat{T}_n^2(k) > x \mid H_1 \} \approx P_n \{ X^2(f') > \frac{x}{c'} \} \quad (3.7)$$

\Rightarrow 即ち, c', f' 10 次の連立方程式の解である。

$$c'f' = p(k-1) + t \sum_{t=1}^k N_t \mu_*^{(t)} \mu_*^{(t)'} \Sigma_t^{-1}$$

$$\begin{aligned} 2c'^2f' &= 2p(k-1) + 4t \sum_{t=1}^k N_t \mu_*^{(t)} \mu_*^{(t)'} \Sigma_t^{-1} \\ &\quad + 4 \sum_{t=1}^k \sum_{i,j,l=1}^p k_{ijl}^{(t)} (\mu_*^{(t)'} \Sigma_t^{-1})_i (\Sigma_t^{-1} - N_t \Sigma_t^{-1} \Lambda' \Sigma_t^{-1})_{jl} \\ &\quad + \sum_{t=1}^k \frac{1}{N_t} \sum_{i,j,l,m=1}^p k_{ijlm}^{(t)} (\Sigma_t^{-1} - N_t \Sigma_t^{-1} \Lambda' \Sigma_t^{-1})_{ij} (\Sigma_t^{-1} - N_t \Sigma_t^{-1} \Lambda' \Sigma_t^{-1})_{lm} \quad (3.8) \end{aligned}$$

但し、 $\mu_t = \mu + \mu^{(t)}$, $\sum_{t=1}^k \Delta_t \mu^{(t)} = 0$, $\Delta_t = (\Sigma_t / N_t)^{-1}$,
 $\Delta = \sum_{t=1}^k \Delta_t$.

こゝらの結果を用ゝたは、大数の N に對して、混合分散混合
 分散行列の推定が成立する。場合、 $\hat{\Sigma}_t$ 推定の方が $\hat{\Sigma}_t^2$ 推定
 より大数の影響をいへ、 μ は、母集団分布の正規性の推定が
 成立する。場合の影響の両方ともは影響する。こゝが合了。更
 に、3次の μ の μ の対称性の両推定の大数の影響を
 するが、推定力 N が大数の N にも影響する。こゝ
 (Ito [4])。

§4. 混合分散混合分散行列に関する推定推定

(1) $H_0: \Sigma = \Sigma_0$ の場合

通常 μ 分散行列 μ の μ の帰無仮説は $H_0^*: \Sigma = \Sigma(\mu)$
 と同義である。母集団分布の正規性の推定 $\mu = \mu$ の尤度
 比 (1.18) は

$$L_2^* = |L|^{-\frac{N}{2}} \exp \left\{ \frac{N}{2} t (\Sigma(\mu) - \Sigma) \right\} \quad (4.1)$$

と等しい。

$$f_2(\Sigma) \equiv L_2^* \frac{1}{N} \quad (4.2)$$

と等しい。母集団分布の正規性の推定 μ の場合の μ の統計
 量、標準分布を考慮する。 $N \rightarrow \infty$ とする、 H_0^* の下では
 μ の統計量 $N(1 - f_2(\Sigma))$ は漸近的に正規分布に近づく。
 分散 μ の二次形式の分布に等しい。こゝは3次の μ

2次元ベクトルに帰着し、4次の9次元ベクトルに帰着し、
 ... (1) $\mu = \mu$, $\Sigma = \Sigma$ の4次の9次元ベクトル k_{ijlm}
 が0であることは、 $N(1 - f_2(x))$ の漸近分布は自由度 $\frac{1}{2}k(k+1)$
 の χ^2 分布に等しい。ここで証明する。まず、 H_{02} が真である
 とし、 $N \rightarrow \infty$ のとき、統計量 $\sqrt{N} \{f_2(x) - f_2(\Sigma)\}$ は漸近
 的に $N(0, \Sigma^2)$ に従う。すなわち、

$$\Sigma^2 = \{f_2(\Sigma)\}^2 \left\{ 2 \{I(\mu) - \Sigma\}^2 + \sum_{j,l,m=1}^k k_{jlm} \right. \\ \left. \times (\Sigma^{-1} - I(\mu))_{jl} (\Sigma^{-1} - I(\mu))_{lm} \right\} \quad (4.3)$$

ここで、 μ_2 検定の真の尤度関数の検出力は $N \rightarrow \infty$
 のとき、母集団分布の4次の9次元ベクトルの影響は、 μ_2
 の4次の9次元ベクトルの影響に等しい (Ito [4])。

(2) $H_{03}: \Sigma = \sigma^2 I(\mu)$ の場合

この場合 (1.20) の統計量 μ_3 を用いる。

$$f_3(x) = \mu_3 \frac{2}{\pi N} = 1 - |x|^{1/p} / (|x|/p) \quad (4.4)$$

ここで、統計量 $\sqrt{N} \{f_3(x) - f_3(\Sigma)\}$ は $N \rightarrow \infty$ のとき、 H_{03} が
 真であるとき、この母集団分布の4次の9次元ベクトルが0
 であることは、漸近的に自由度 $\frac{1}{2}(p+2)(p-1)$ の χ^2 分布に
 従う。すなわち、 H_{03} が真であるとき、統計量 $\sqrt{N} \{f_3(x) - f_3(\Sigma)\}$
 は漸近的に $N(0, \Sigma_3^2)$ に従う。すなわち、

$$\Sigma_3^2 = \{f_3(\Sigma)\}^2 \left\{ 2 \{I(\Sigma)^2 / (I(\Sigma))^2 - \frac{1}{p} \right\}$$

$$+ \sum_{j, l, u=1}^k k_{j, l, u} (\bar{\Sigma}/n - E(\mu)/n \bar{\Sigma})_j (\bar{\Sigma}/n - E(\mu)/n \bar{\Sigma})_{lu} \quad (4.5)$$

よって, (1) の場合と同様, λ_4 検定が真の μ と $\bar{\Sigma}$ の検出力が $N \rightarrow \infty$ のとき, 母集団平均 μ の 1, 2, 3 次, $\bar{\Sigma}$ の 1, 2, 4 次 \rightarrow μ の存在の影響 \rightarrow $i=1, 2, \dots, p$, 4 次, $\bar{\Sigma}$ の 1, 2, 4 次 \rightarrow μ の存在の影響 \rightarrow $i=1, 2$ (Ito [4]).

(3) $H_{04}: \sum_{g=1}^2 g_{\alpha} = 0 \quad (\alpha, \beta = 1, 2, \dots, p)$ の場合

正規母集団の仮定の下に得られた順序比検定統計量 (1.22) の λ_4 を用いて,

$$f_4(\underline{V}) \equiv \lambda_4^{\frac{2}{N}} = |\underline{V}| / |\underline{V}_1| \quad (4.6)$$

と \underline{V}_1 の \rightarrow μ , $|\underline{V}_1| = \prod_{g=1}^2 |\underline{V}_{g\beta}|$. \rightarrow $n \rightarrow \infty$, 統計量 $N(1 - f_4(\underline{V}))$ は $N \rightarrow \infty$ のとき, H_{04} の下に $\mu, \bar{\Sigma}$ の正規母集団の正規性が仮定 \rightarrow $\mu, \bar{\Sigma}$ のとき, 漸近的に自由度 $\sum_{g=1}^2 k_{g\beta} k_{\alpha} \cdot p^2$ の χ^2 分布に従うことが証明される。従って, H_{04} が真の時 \rightarrow $\mu, \bar{\Sigma}$ のとき, 統計量 $\sqrt{N} \{f_4(\underline{V}) - f_4(\bar{\Sigma})\}$ は漸近的に $N(0, \sigma_4^2)$ に従う。 $i. e. \rightarrow$ $\mu, \bar{\Sigma}$,

$$\begin{aligned} \sigma_4^2 &= \{f_4(\bar{\Sigma})\}^2 \left\{ 2 \text{tr} \left(\bar{\Sigma}^{-1} (\bar{\Sigma}^{-1} - \sum_{i=1}^2 \bar{\Sigma}_i^{-1}) \right)^2 \right. \\ &\quad \left. + \sum_{j, l, u=1}^k k_{j, l, u} (\bar{\Sigma}^{-1} - \bar{\Sigma}_1^{-1})_j (\bar{\Sigma}^{-1} - \bar{\Sigma}_1^{-1})_{lu} \right\} \quad (4.7) \end{aligned}$$

但し,

$$\bar{\Sigma}_1 = \begin{bmatrix} \bar{\Sigma}_{11} & 0 & \dots & 0 \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ 0 & 0 & \dots & \bar{\Sigma}_{11} \end{bmatrix}$$

従って, 母集団の正規性の仮定 \rightarrow $\mu, \bar{\Sigma}$ のとき, λ_4 検定を用

… であるが、 Σ の真の値が $N \rightarrow \infty$ のとき漸近的に
 正則性が成り立つが、検出力の4次の収束速度に
 影響を及ぼす (Ito [4])。

(4) $H_{05} : \Sigma_1 = \Sigma_2 = \dots = \Sigma_k$ の場合

本組の母集団が k 個の正規分布に従うと仮定し、 Σ の推定に
 自由度 k の検定統計量 (1.25) の λ_5 を用いる。

$$f_5(\lambda_1, \lambda_2, \dots, \lambda_k) \equiv \lambda_5^{\frac{k}{N}}$$

$$= \frac{\prod_{t=1}^k |\lambda_t|^{k/2}}{\prod_{t=1}^k |\Sigma_t|^{k/2}} \quad (4.8)$$

と仮定する。このとき、 H_{05} が真であるとき、母集団全体の4
 次収束速度の限界が 0 であることは、統計量 $N(1 -$
 $f_5(\lambda_1, \dots, \lambda_k))$ の $N \rightarrow \infty$ のとき漸近的に自由度 $\frac{1}{2}k(k+1)(k-1)$
 の χ^2 分布に従うこと、 H_{05} が真でないとき、統計量
 $\sqrt{N} \{ f_5(\lambda_1, \dots, \lambda_k) - f_5(\Sigma_1, \dots, \Sigma_k) \}$ の $N \rightarrow \infty$ のとき漸近
 的に $N(0, \sigma_5^2)$ に従うこと、

$$\sigma_5^2 = \{ f_5(\Sigma_1, \dots, \Sigma_k) \}^2 \sum_{t=1}^k \left\{ 2 \text{tr} \left(\Sigma_t^{-1} - \Sigma^{-1} \right)^2 \right. \\ \left. + \sum_{i,j,l,m=1}^k \kappa_{ijlm}^{(4)} \left(\Sigma_t^{-1} - \Sigma^{-1} \right)_{ij} \left(\Sigma_t^{-1} - \Sigma^{-1} \right)_{lm} \right\} \quad (4.9)$$

に従う、(1), (2) の場合と同様、母集団の正規性が仮定され
 … とき λ_5 検定の真の値が $N \rightarrow \infty$ のとき
 4次の収束速度に及ぼす影響を及ぼす (Ito [4])。

参考文献

1. Anderson, T. W. (1958). *An Introduction to Multivariate Statistical Analysis*. Wiley, New York.
2. Beunett, B. M. (1951). Note on a solution of the generalized Behrens-Fisher problem. *Ann. Inst. Statist. Math.* 2, 87-90.
3. Hotelling, H. (1950). A generalized T-test and measure of multivariate dispersion. *Proc. Second Berkeley Sym. Math. Statist. Prob.* 23-41.
4. Ito, K. (1968). On the effect of heteroscedasticity and non-normality upon some multivariate test procedures. To appear in *Proc. Second International Symposium on Multivariate Analysis*, Academic Press, New York.
5. Ito, K. and Schull, D. J. (1964). On the robustness of the T_0^2 test in multivariate analysis of variance when variance-covariance matrices are not equal. *Biometrika*. 51, 71-82.
6. James, G. S. (1954). Tests of linear hypotheses in univariate and multivariate analysis when the ratios of the population variances are

- unknown. *Biometrika*. 41, 19-43.
7. Scheffé, H. (1943). On solutions of the Behrens - Fisher problem based on the t -distribution. *Ann. Math. Statist.* 14, 35-44.
8. Wilks, S. S. (1932). Certain generalizations in the analysis of variance. *Biometrika*. 24, 471-494.